

清初のハン号について——モンゴルの視点から

ノルブジャムス・ハスバガナ

マンジュ（満洲）が一部族国家として東北アジアに興起したころ、彼らと境を接していたのは、明朝、朝鮮およびモンゴルであった。

著者がここで提起しようとするのは、マンジュとモンゴルの関係をモンゴルの側に立って見るとどうなるか、モンゴルはそもそもマンジュの発展にどのような影響を及ぼしたのか、両者の間には継承関係が存在するのか、という問題である。

アルタン=ハーンの伝記である *Erdeni tunumal neretü sudur*（宝の清澄という名の書／アルタン・ハーン伝）には、トゥメドのアルタンがハーン号を帯びた事情に関する詳しい記述がある。それによれば、アルタンはそれぞれの時期に、彼の功績に応じて“suu tu”, “tüsiye-tü sečen qayan”, “qotala esrua yeke kücün tü cakravarti nom-un qayan” といったハーン号を帯びている。それ以外に、この伝記では、一般的な呼称として、“altan gegen qayan” とか“boyda gegen qayan” といった名でも呼ばれている。

アルタンが sečen qayan という称号を帯びたことは、彼がフビライ・ハーンに倣っていたことを窺わせる。

アルタンがハーン号を得た後、モンゴルの有力な諸部の首長は、相次いでハーンの称号を帯びた。右翼ハラチンの“küdülen qayan” もその一つである。ハラチン=オトクの最初の首長は、ダヤン=ハーンの第三子バルスボロドの第四子バヤスハル（1510-72）である。明の漢文史料では、彼は「老把都」と書かれている。彼は“küdülen qayan” の称号をもっていた。küdülen qayan はしばしば、チャハルの大ハーンであるボディ、トゥメドのアルタン=ハーン、オルドスのジノンと並んで、明人から「四大頭目」と呼ばれていた。

ヌルハチ以前の女真諸部族の中で、ハダ、ウラなどはすでにハン号を称していた。

ハン号を称するまでは、ヌルハチの称号は“sure beile” であった。モンゴル文『満洲実録』では、これに対応するモンゴル語は“sečen noyan” であり、漢文では「聡睿貝勒」である。エンゲデルが来てあらたな称号を奉ってから、ヌルハチはマンジュ語で“sure kundulen han” と呼ばれるようになり、略して“kundulen han” あるいは“sure han” となった。“kundulen” について、一部の人はモンゴル語の「縦横」の横（köndelen）であると解したり、漢語の「神武」であると見ているが、それらはみな誤りである。『武皇帝実録』は、「崑都侖」の意味を「恭敬」と解釈しており、これが正しい。前述のように、“küdülen” という称号はヌルハチが最初に用いたものではなく、もともと右翼ハラチンの首長の称号であった。

ヌルハチの勢力伸張にともなって、このようなハン号が大いに必要とされたのである。ハンの称号があれば、マンジュ部の内部で権力を一手に握り、近隣諸部と対等に付き合う可能性が生まれる。すなわち、マンジュ部の中で唯一ハン号をもつものとなり、権力闘争においてシュルガチとの差異を際立たせることができるのである。

満文原檔を見ると、ヌルハチをまたマンジュ語で“genggiyen han”（対応するモンゴル語は“gegen qayan”，漢語は「明汗」あるいは「英明汗」）と称している場合もある。では、この称号は何に由来するのか？ それは、1616年にあらたに帯びたハン号である。全称は、満文原檔に“abka geren gurun be ujikini seme sindaha genggiyen han”と書かれている。これは、ヌルハチが天意によってハン号を得たという思想を人々に明示したものである。この称号を、『武皇帝実録』は「列国沾恩明皇帝」、『高皇帝実録』は「撫育列国英明皇帝」としている。これは『満洲実録』の“geren gurun be ujire genggiyen han”に相当し、モンゴル語では「irgen urqan-iyen ülemji örüsüyen tedkegçi tayisu gegen qayan」と称揚した。その年号を tngri-yin jayayatu と名づけた」と記されている。

“genggiyen”，“gegen”というの、英明という意味である。前述のように、トゥメドのアルタン=ハーンも同じ称号を用いていた。

ホンタイジのハーン号は、マンジュ語では“sure han”，モンゴル語では“sečen qayan”で、意味は一致している。なお、「天聰汗」というのは、これに「天」という語を付け加えたものである。ホンタイジのこの称号が、ヌルハチに由来することは確実である。モンゴルでも、子が父の称号を受け継いで用いるのは一般的なことであった。“sečen qayan”という称号は、大元ウルスの時代にフビライの称号であったが、トゥメドのアルタン=ハーンが、フビライ=ハーンとパクパ=ラマの例に倣おうとしてこの称号を帯びたことは、上に述べたとおりである。ヌルハチとホンタイジが、世代を超えてこの称号を受け継いだのも、かの名高いフビライ=ハーンに倣うという思想があったと考えられる。

『大ハン登位檔』の記載に基づくと、天聰十年（1636）四月八日に、内外のマンジュ、モンゴル、漢の諸王大臣が盛京城に集まって表文を奉った際、「朝鮮を降し、モンゴルを統一し、また玉璽を得た」ことを、ハンの称号を帯びる三つの条件として強調している。

さらに言えば、“sečen qayan”としての天聰の十年間にもっとも大きな利益を得たのは、当のホンタイジであったが、そのことに関して、彼がモンゴル人たちから得ていた支持を、よりの確に評価する必要がある。ホンタイジの主な后妃は、みなホルチン出身であった。当時、マンジュの対外戦争においてホルチン人が大きな役割を果たしていたことは、周知のとおりである。ここから、ホンタイジがハン権力を伸張させ、1636年にあらたなハン号を帯びるにあたって、ホルチンによって代表されるゴビ以南のモンゴル人の支持が重要な一要素であったことが知られよう。

言うまでもなく、このときにマンジュ人が国名を改めて“daicing gurun”と称し、また“gosin onco hūwaliyasun enduringge han”（寛温仁聖皇帝）という新しいハン号を奉ったのは、諸々の種族・部族全体の上に立つ統治者という意味を込めたものと考えられるが、より注意を払うべきは、あらたなハン号の中に見て取れるモンゴルの要素である。それは、あらたなハン号に含まれる“enduringge han / boyda qayan”という呼称である。モンゴル人にも同様の慣用的な呼称があった。トゥメドのアルタン=ハーンもそのように呼ばれていたことは、既述のとおりである。これは、モンゴル人にとって受け入れやすい慣れ親しんだ呼称であっ

た。後の時代に、康熙帝をもモンゴル人は“boyda qayan”と呼んでいた。

1644年の十月一日、北京においてフリン（順治帝）はあらためてハン位に即く儀式を行った。このことについて、「天子たる皇帝の位に即いた」、「大いなる位」に即き、「大国の皇帝」となったと、清の公文書は記している。

マンジュ人がもともとモンゴル文化の影響下にあったことは、周知のとおりである。まさにこのようなモンゴル文化の強い影響のもとで、マンジュー大清国は次第に強大化していった。本研究を通じてより明確になったのは、マンジュの初期の統治構造が、隣接するモンゴル諸部と同様であったということである。このことはまた、“baysi”, “jaryuči”, “darqan”, “bayatur”, “ejen”, “tayiji”などの王侯・官僚の呼称、あるいは一般的な称号、自身の出自を表現する語彙などを、国政の中に広く取り入れて使用したことからも、より深く首肯されよう。このような視角からすれば、マンジュー大清国を大モンゴル国の継承国家と称しても差し支えないと思われる。

一面からいえば、マンジュー大清国の初期のハン号の意味を解釈する際に、単に中国皇帝と比較するのは、いささか偏った見方だと考えられる。清の側から見れば、ハンというのは、当時のモンゴルのハーンにより近いものであった。

他の面からすれば、マンジュはただモンゴル文化を受容したばかりでなく、それを受容しつつ発展させ、変化させた側面があることにも注意を向ける必要がある。これらすべては、マンジュー大清国の興隆を研究する際にきわめて重要な点であると考えている。